

ケネス・ルオフ（木村剛久訳）

『紀元二千六百年 消費と観光のナシヨナリズム』

（朝日新聞出版、二〇一〇年。原著 *Imperial Japan at its Zenith: The Wartime Celebration of the Empire's 2600<sup>th</sup> Anniversary*）

酒井一臣

一

一九三一年の満州事変を起点として太平洋戦争への道を考察することに対して、近年の政治外交史研究が一定の距離を置いていることは明らかで、たとえば、井上寿一の「協調のための国際連盟脱退論」や坂野潤治の民主化の進展のなかでの戦争勃発という議論を挙げる<sup>1)</sup>ことができる。しかし、一九三七年七月に始まる日中戦争が、日本を後戻りできない状況に追いやり、戦争による破滅的事態を不可避にしたという点は、一般的な理解として浸透しているといつてよい。

書評

ここでとりあげるルオフの研究は、こうした理解に疑問を投げかけ、紀元二千六百年、つまり一九四〇年が

消費と観光という戦時下の暗いイメージからかけ離れた現象の戦前期における頂点だったと主張する。もし、その主張が説得的であるならば、戦時期の日本像は大きく変わることになる。

まずは、本書の議論の概要を紹介していこう。

比較的長い「序章」では、帝国日本という視点の意義、ファシスト的近代性の現れとしての紀元二千六百年研究の重要性、一九四〇年に六〇年代大衆消費社会への連続性をみることの必要性が説かれる。序章は、本書の構成紹介を越えて、戦時期日本史研究の諸問題を包括的に論じたものであり、後で再度論じたい。

「国史ブーム」と題された第一章では、二千六百年間の日本史が大和民族の栄光に都合のよいように捏造されたこと、そのなかで学者が果たした役割を紹介している。ルオフは、国史の操作に、官民を問わず、多くの活動主体が関わったことを指摘し、国史ブームののって美化された自国の歴史が説かれた本や雑誌を購入した国民も共犯であったとする。くわえて、本章のもう一つの重要な指摘は、学者の責任問題である。この種の議論では平泉澄の名を思い浮かべる人が多いだろうが、ルオフがより注目するのは、平泉のように戦後に糾弾されて東京帝国大学の職を追われた学者ではなく、辻善之助や坂本太郎など、「戦後もその尊敬される学問上の地位を保った」学者である。歴史学者といえども、いや學術の世界に身を隠すことができる学者こそ、自己批判はもちろんのこと、自分の師や学界内で様々な「権力」をもった人物の批判をしにくい。報道の重要性を訴える新聞社やテレビ局が、自社の抱える問題や報道界の欠点はほとんど報道しないのと同じである。日本の歴史学界とは距離をおくことのできるアメリカの研究者が、実名を挙げて学界で権威ある人物を批判する意義は大きく、全体の主旨は別にして、本書のなかで最も重要な記述の一つかもしれない。

第二章では、紀元二千六百年の祝祭的雰囲気で大衆参加と大量消費が支えたと論じる。いうまでもなく、当時喧伝されたのは、「滅私奉公」であり万世一系イデオロギーによるゆがんだ歴史観・民族観だった。しかし、

反動的であるはずのものが、国民的一体感による消費を促し、国史創造という近代的行為をさかんにしたのであって、「紀元二千六百年を論じる際の主要テーマは、大和民族の優越性を称揚する祝典のさなかでも、大和民族の優越性を誇るといふ反動性に凌駕されることのなかった日本の突出した近代性にほかならなかったたのである」（二二六頁）。こうした議論は、近代日本と西洋文明の関係について多くの示唆を与えてくれる。日本には常に自国を西洋列強に伍する文明国にするという目標があったといいかえてもよい議論である。近代日本の制度・文物・生活様式など、あらゆるものが西洋文明の影響を受け、日本主義的な議論も西洋文明受容への反動であった。ただし、こう言い切ってしまうと、近代日本史は西洋文明との関係のなかで完全に相対化されてしまう。それが日本史研究にとってどこまで意義のあることなのか、評価がわかるところであろう。

内外の観光がとりあげられるのが、第三章から第五章である。宮崎や奈良などの「聖蹟観光」、「朝鮮観光」、「満州聖地観光」の諸相が紹介されるのだが、様々なパンフレット、絵葉書、著者が古書店でみつけた当時の葉書の何気ない記述など、多様な史料が使われており、ルオフの真骨頂を示す三章である。ルオフは観光を論じることで決して戦時下の国民動員の問題や帝国日本の残忍な支配を軽視しようとするのではない。「それでも、多くの日本人が、その生活を驚くほど普通に営んでいたことを知ってほしい」（二二九頁）と述べている。ただし、ルオフ自身も指摘するように、観光旅行は安価で楽しめるレジャーではなく、「多くの日本人」に、貧困に苦しむ農民や都市労働者は含まれないのである。戦前期の観光などのレジャーや文化・芸術活動に潜む政治的意図だけでなく、受容した側の反応に着目する社会史的研究が増えてきているが、現代日本の大衆消費社会とは「多くの日本人」の階層がかなり異なることには注意しなければなるまい。

戦時下での海外移民の問題を扱った第六章では次のような主張がなされる。一九四〇年時点で約二五〇万人の移民がいたが、大和民族の偉大性といった宣伝にアイデンティティを求めただけでは現地での生活は成り立

たず、現地への同化と日本魂の維持という両立しがたい問題を前に、「間国民性」、すなわち日本人性と現地との結びつきを選び取ることは、うまく機能しなかったというのである。この章は、本書の目的の一つ、日本列島に限定しない帝国日本像を描くために重要ではあるが、主張がいささか平板である上、一九四〇年を消費と観光の頂点とする議論のなかでどう位置づけるのかわかりにくい。ルオフは英語でアメリカ社会に向けて本書を書いたのであり、当然、アメリカの日本研究者としては日系人問題に目配りをするのが重要である。続く「結び」にも「米国の日系人問題」が論じられていることから、そうした配慮から第六章は設けられたのではないかとも考えられる。

## 一一

以上、ごくおおまかに内容を紹介したが、本書が強調する「暗い谷間」ではない一九四〇年という主張の意義はどこにあるのだろうか。

戦時体制を構築すべく政府や軍部が大衆を操作したという議論や、そうした社会で人々は暗い生活を強いられたという解釈は、完全にまちがいだったとはいえない。ただし、一方で、戦時下の出来事は、戦争と結びつけて批判すべきだというだけでは、ある種の思考停止に陥る可能性もある。じじつ、冒頭で紹介したように、戦時に向かう三〇年代の日本という固定的な発想を相対化する議論も出てきている。一九四〇年の時点でも、人々はデパートで行われる日本の輝かしい歴史の展覧会を見学しつつ消費行動をし、余暇には自国の歴史と自分のアイデンティティを重ねながら観光を楽しんでいたとしても不思議はない。政治的意図はどうであれ、そんなことはお構いなしに、大衆は消費やレジャーを楽しんでいた。翻ってみれば、大衆の消費行動や観光が、

ファシズムを下支えしていたともいえる。ルオフの主張は、本書を読む限り、それほど突飛なものではない。実のところ、戦時下であっても、敗色が濃厚でなければ、社会は暗くならない。多くの戦死者も、遠い戦場のことであれば、家族以外には武勇談もしくは同情譚の種でしかないという残酷な現実もある。まちがったことではないにしろ、戦争は罪悪である・批判すべきであるという倫理観、くわえて、アジア・太平洋戦争は悲惨な敗北に帰したという結果論。そうした前提が、戦時下についての歴史研究を思考停止に陥らせることを、本書はあらためて想起させてくれるのである。

しかし、本書が重視する植民地も含めた帝国日本の評価をする場合、日本人研究者が日本支配下の植民地・占領地に「暗い谷間」以外の面があったと主張するのは、学術的というよりは政治的配慮という面もあって困難である。近現代日本史には、研究をしている主体が日本人であるということ、史料の根拠があるから<sup>①</sup>もしくは「理論的に正しいから」中立公平であるとして学術研究がしにくい分野が厳然としてある。その代表的なものが、アジア諸国との関係史であり、もう一つが天皇であろう。これらの分野については、しばしば日本人以外の研究者が新しい展開に結びつく議論を提供してきた。また、日本人研究者が外国人日本史研究者に協力することで、日本人が言いにくいことを主張してもらおう場合もある。逆にいえば、外国人の日本研究者が活躍するには、日本人が触れにくい分野が適しているともいえ、ルオフの前者が『国民の天皇』（原著、二〇〇一年、岩波現代文庫二〇〇九年）であることは当然かもしれない。その意味で、日本の読者が、本書のような、日本を思い切って相対化した外国人研究者のすぐれた著作から学ぶことは多い。

日本の相対化という問題は、日本はファシズムに似た体制だったという本書の重要論点にも関係する。戦時下の日本がファシズムであったか否かという点は評価が決定していないが、ルオフの議論は、これまでの論争と少し次元が異なっているように思われる。ルオフはカメラの焦点を大きく引いてみれば、日本の体制はアメ

リカ・イギリスよりドイツ・イタリアに近かった、もしくは、第二章の紹介で言及したように、近代性を内包する大衆動員という面がファシズムの事例と合致すると主張しているのである。そこまで大枠の比較になれば、とりたてて反論する必要はなくなってしまう。これまで注目されにくかった戦時期日本の一面を細かい実証で明らかにしながら、理論的な評価の部分では一気に日本を相対化して解決してしまう手法は、本書にダイナミズムを与える一方で、実証部分と理論部分のつながりの悪さを感じさせる一因となっている。

いま一点、日本の相対化について指摘したい。本書はルオフというアメリカの大学の研究者がアメリカの読者に向けて書いた書物である。アメリカの大多数の読者にとって、相対化されていない日本史に意味はない。アメリカでは、経済不況が続き国際的影響力の低下が著しい日本への関心が薄れており、すぐに役立つ政治的・社会的教訓として他国の歴史を知るといふ一般論以上の意味を、日本に見出してはくれない。これに対して、本書の各章では日本人研究者でも扱わないような興味深い史料が使われているではないかという反論もあろう。しかし、それはアメリカの読者の異国趣味的な関心を期待したものである可能性がある。日本の読者さえ、「そうだったのか」と異文化体験をするような気分になる戦時下の諸史料である。アメリカ人が、天皇のもとに狂った戦争をした不気味な黄色い猿の国の別の一面を、興味津々と紀元二千六百年の祝典パンフレットに見出しても何の不思議もない。

率直に言えば、日本人の学生・読者に日本語で研究成果を提示するだけで存在価値を示せる大多数の日本の大学の日本史(日本政治外交史)研究者にとって、現在の日本が国際政治経済上でどのような立場にあると、また、日本がジャポニズム的扱いをされていようと困らないかもしれない。それでも、近現代日本史が、少なくともアジア・太平洋の国際関係史と無縁でいられないという現実を考えれば、アメリカの研究者が示す日本像の意味にはもっと敏感になる必要があるのではないだろうか。また、困難であるにしても、日本史の相対化

にもっと真剣に向き合うべきではないのか。本書が示唆する別の面として、また自戒として、そう指摘して  
きたい。

注

- (1) 多くの著作があるが両氏だが、とりあえず、井上寿一『戦前日本のグローバリズム』新潮選書、二〇一一年、坂野潤治『昭和史の決定的瞬間』ちくま新書、二〇〇四年。
- (2) 河島真「『ファシズム論争』と十五年戦争研究」『日本史研究』第五七五号、二〇一〇年七月。